

平成25年度 認知症対策・権利擁護分科会

資料 2-2

議事（2）

北九州市における認知症施策の状況

- ・平成24年度北九州市認知症に関する意識及び
実態調査結果（抜粋）

第2章 調査結果の概要

第2章 調査結果の概要

主な調査結果は以下のとおりである。また、前回調査結果（平成20年度実施）と比較可能な項目については比較を行っている。

- ※【高】=在宅高齢者・家族用調査、【若】=若年性認知症用調査、【医】=医療機関用調査、【も】=ものわすれ外来協力医療機関用調査、【介】=介護保険事業者用調査 を表す（以下同じ）。
- ※【若】=若年性認知症用調査、【介】=介護保険事業者用調査は平成20年度には実施しておらず、今回新規に行った。

1. 認知症患者本人やその家族の状況

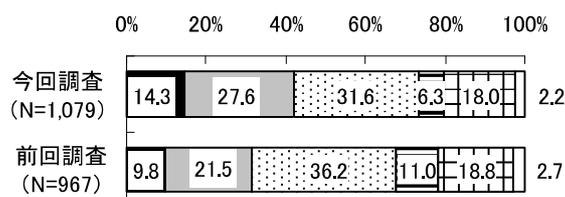
(1) 認知症の疑い・不安

【高】認知症（疑い含む）の人は2割強（24.3%）を占める。

在宅高齢者の認知症の疑い・不安について、「未受診だが認知症と思われる症状があり、生活に支障がでている」は6.3%、「医師から認知症であるとの診断を受けている」は18.0%であり、これらをあわせた認知症（疑い含む）の人は2割強（24.3%）を占める。

また、この割合は前回調査に比べて5.5ポイント低い（前回は29.8%）。

在宅高齢者・家族用調査
[全員に質問]



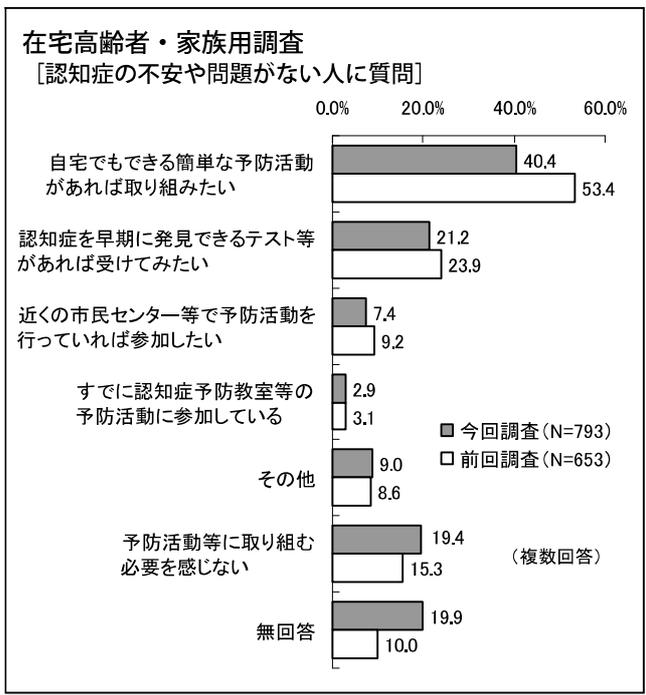
- 全く不安はない
- 将来的な不安を感じるが、現在は不安はない
- もの忘れなどの不安はあるが、問題なく生活をしている
- 未受診だが認知症と思われる症状があり、生活に支障がでている
- 医師から認知症であるとの診断を受けている
- 無回答

※前回調査とは平成20年度調査である（以下同じ）。

(2) 予防意識

【高】自宅でもできる簡単な予防活動があれば取り組みたいが最も多い。

認知症に不安がなかったり、多少不安があっても日常生活に問題がない人の予防意識については、「自宅でもできる簡単な予防活動があれば取り組みたい」(40.4%)が最も多く、次いで「認知症を早期に発見できるテスト等があれば受けてみたい」(21.2%)となっており、前回調査と同じ項目が上位にあがっている。

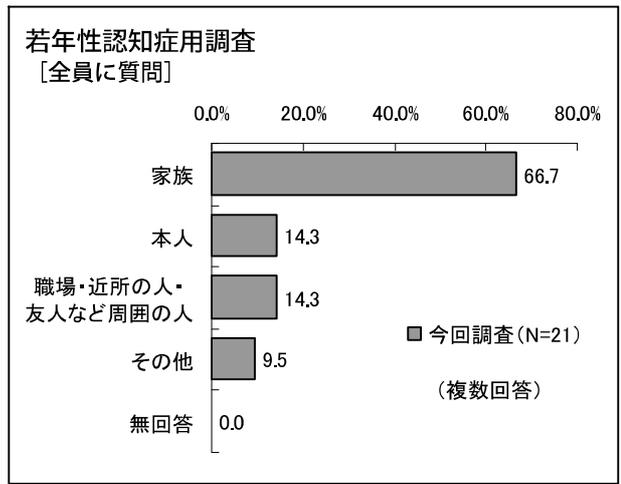
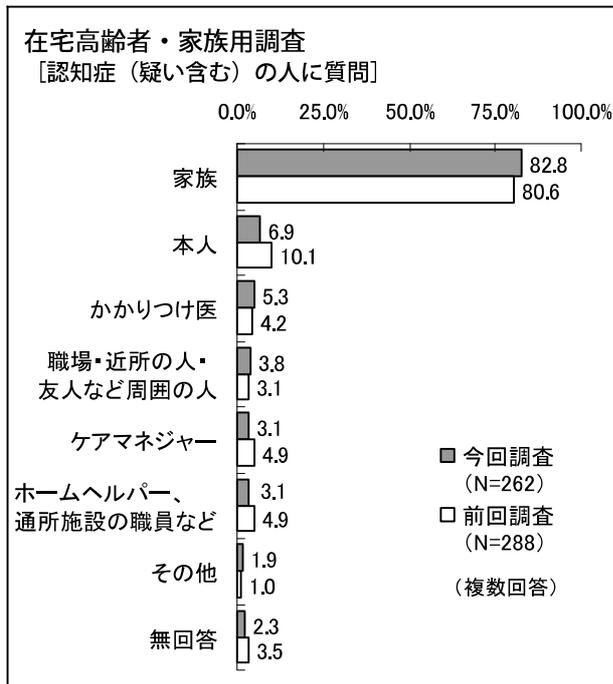


(3) 認知症に気づいたきっかけ・気づいた人

【高・若】認知症に気づいた人は家族が圧倒的に多い。

認知症に気づいたきっかけは、在宅高齢者・若年性認知症の人とともに「置き忘れ、しまい忘れが多くなった」(高：71.8%、若：52.4%)や「同じことを何度も言ったり、聞いたりするようになった」(高：74.4%、若：42.9%)が上位にあがっている。

これらのきっかけについて最初に気づいた人は、在宅高齢者では前回調査と同様に「家族」(今回：82.8%、前回：80.6%)が8割以上で大半を占めている。同様に若年性認知症の人についても「家族」(66.7%)が最も多い。

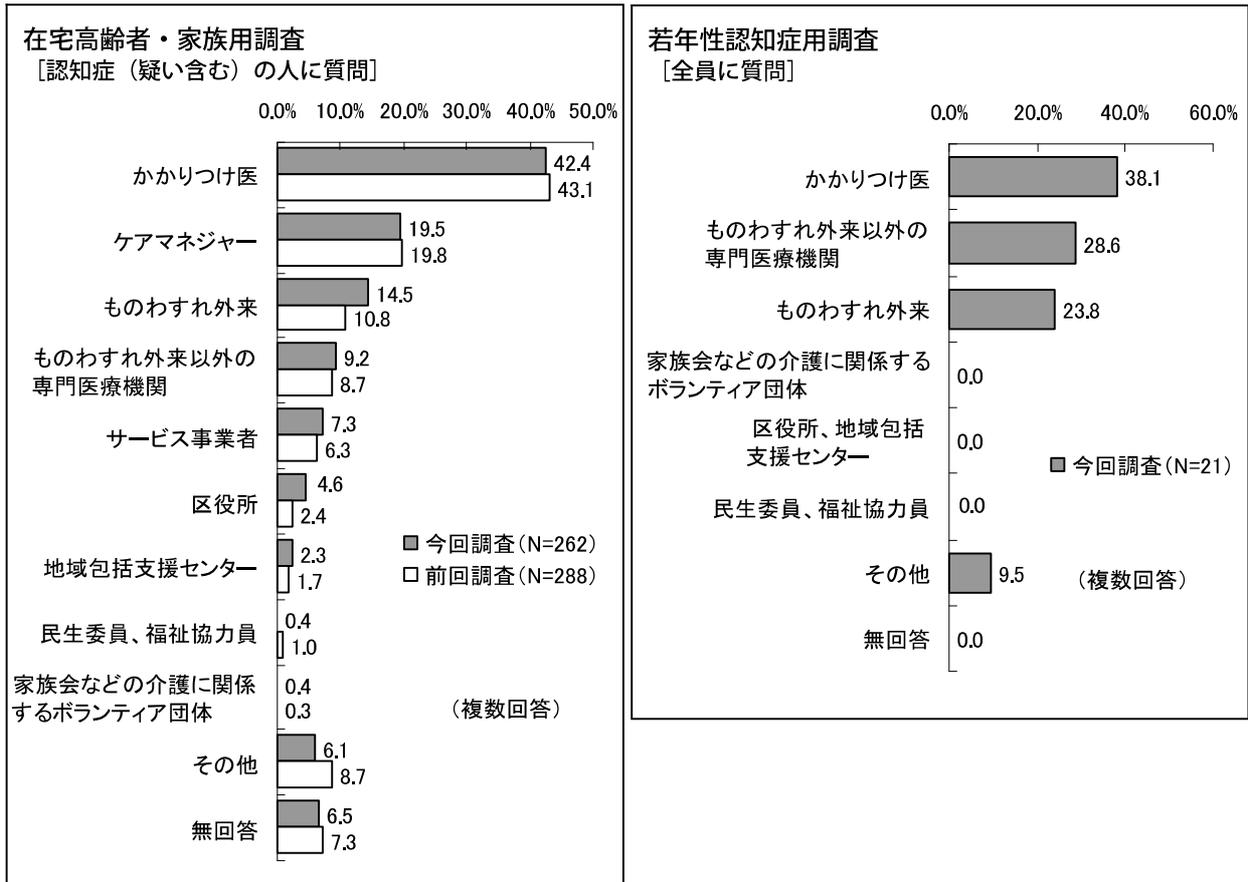


(4) 認知症の相談・受診先

【高・若】認知症の相談・受診先は「かかりつけ医」が最多。

認知症の相談・受診先について、在宅高齢者は前回調査と同様に「かかりつけ医」(今回:42.4%、前回:43.1%)が4割以上で最も多く、次いで「ケアマネジャー」(今回:19.5%、前回:19.8%)、「ものわすれ外来」(今回:14.5%、前回:10.8%)となっている。

また、若年性認知症の人についても「かかりつけ医」(38.1%)が最も多い。

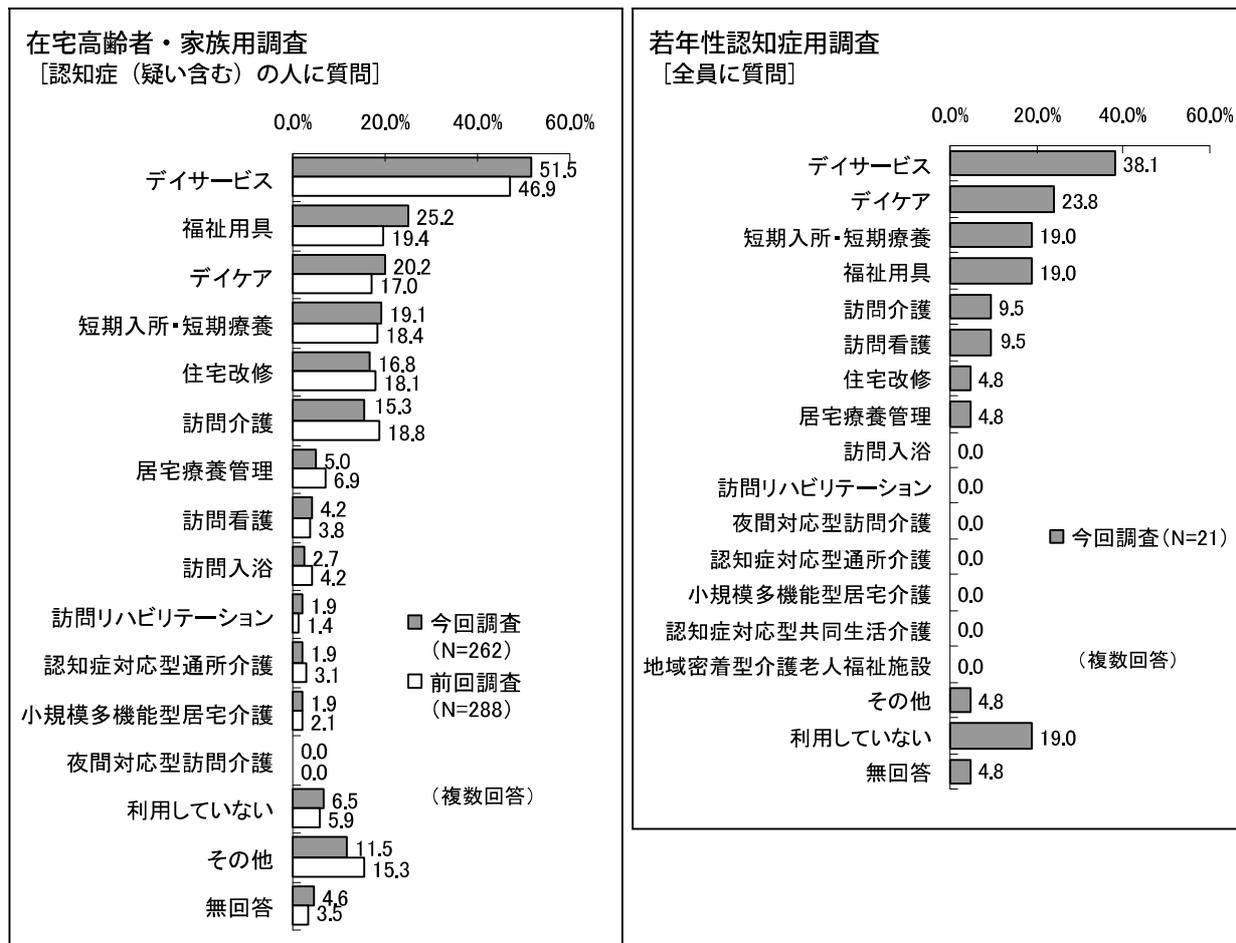


(5) 介護保険サービスの利用状況

【高・若】 デイサービスの利用が最も多い。

介護保険サービスの利用状況について、在宅高齢者は前回調査と同様に「デイサービス」（今回：51.5%、前回：46.9%）が最も多く、今回調査では認知症（疑い含む）の人の半数以上が利用している。また、これに次いで「福祉用具」（今回：25.2%、前回：19.4%）となっている。

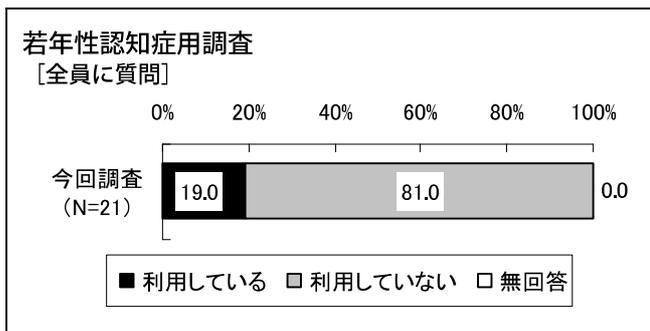
若年性認知症の人についても「デイサービス」（38.1%）が最も多い。



(6) 障害福祉サービスの利用状況

【若】 若年性認知症の人の約2割が障害福祉サービスを利用。

若年性認知症の人のうち、障害福祉サービスの利用者は19.0%である。

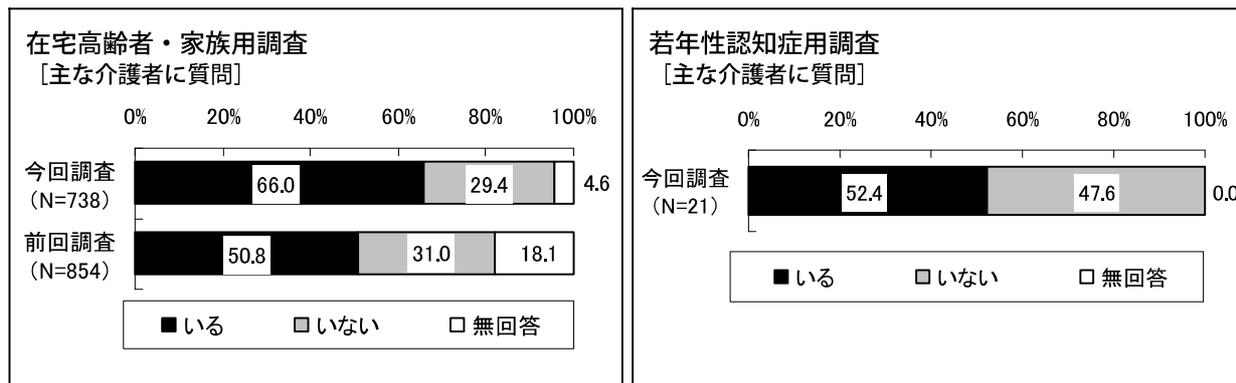


(7) 主な介護者へのサポート

【高・若】在宅高齢者の介護者の約3人に2人、若年性認知症の人の介護者の約半数は介護を手伝ってくれる人がいる。

主な介護者の介護を手伝ってくれる人の有無について、在宅高齢者では「いる」の割合が今回調査で7割弱（66.0%）となっており、前回調査（50.8%）より割合は高くなっているものの、「いない」については前回調査と同様に3割（今回：29.4%、前回：31.0%）を占めている。

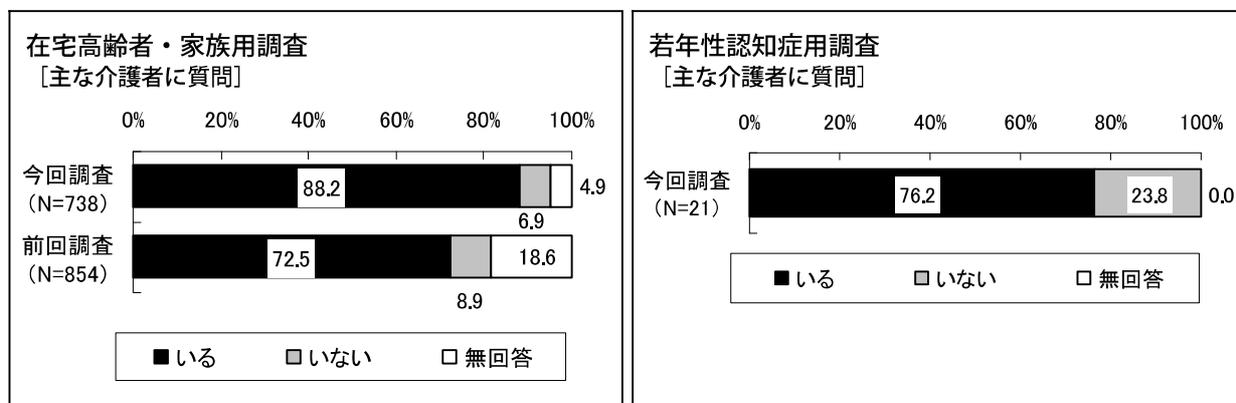
若年性認知症の人については、「いる」（52.4%）と「いない」（47.6%）が概ね半数ずつとなっている。



【高・若】主な介護者の8割前後は相談相手があり、その相談相手については、在宅高齢者の介護者では「ケアマネジャー」が、若年性認知症の人の介護者では「主治医」が最多。

主な介護者の介護について相談できる人の有無について、在宅高齢者では「いる」は今回調査で9割弱（88.2%）を占めており、前回調査（72.5%）に比べて割合は高くなっている。その相談相手については前回調査と同様に「ケアマネジャー」（今回：61.0%、前回：56.9%）が最も多くなっている。

若年性認知症の人については、「いる」が76.2%であり、その相談相手は「主治医」（43.8%）が最も多い。

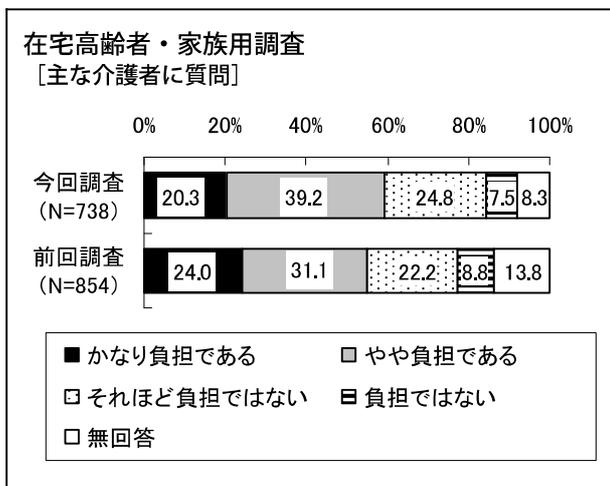


(8) 介護の負担感

【高】在宅高齢者の介護者の過半数が介護に負担を感じている。

介護の負担を感じている人（「かなり負担である」+「やや負担である」の割合）は、今回調査で59.5%を占めており、前回調査の55.1%と同様に過半数を占めている。

また、この負担を感じている人の割合は認知症自立度が重くなるほど（認知症が進行するほど）高く、負担度は増す傾向にある。



(9) 近所への説明

【高・若】近所へ説明している人は在宅高齢者で半数弱、若年性認知症の人で7割弱を占める。

認知症（疑い含む）に関する近所への説明について、在宅高齢者は前回調査と同様に「伝えている」が半数弱（今回：49.2%、前回：46.2%）を占めており、「伝えていない」は3割強（今回：35.0%、前回：31.4%）となっている。また、認知症自立度が軽いほど（認知症が進行していない人ほど）「伝えていない」の割合は高くなっている。

若年性認知症の人については、「伝えている」は66.7%、「伝えていない」は23.8%である。

